

精選 折口信夫

IV

芸能史論

折口信夫

岡野弘彦 編

慶應義塾大学出版会

精選
折口信夫
IV
芸能史論
目次

凡例

5

翁の発生

7

能楽に於ける「わき」の意義 「翁の発生」の終篇

49

信州新野の雪祭り

58

盆踊りの話

65

組踊り以前

73

舞ひと踊りと

93

*

無頼の徒の芸術

96

日本芸能史序説

103

古代演劇論

130

*

信太妻の話

150

餓鬼阿弥蘇生譚

190

小栗外伝 (餓鬼阿弥蘇生譚の二)

201

*

役者の一生

217

江戸歌舞妓の外輪に沿うて

241

玉手御前の恋

*

身毒丸

269

戦後の折口先生

岡野弘彦

286

解題

長谷川政春

293

凡例

- 一 本アンソロジー『精選 折口信夫』は、中央公論社版『折口信夫全集』（一九九五―二〇〇二）を底本とした。
- 二 各著作の末尾に、初出、および発表年月を記した。
- 三 本文校訂にあたって、明らかな誤植はとくに断ることなく修正したが、説明を要する修正箇所については、解題に記した。
- 四 原則として新字体・旧仮名遣いとするが、可能なかぎり底本の用字・用語を尊重した。例外は解題に記した。
- 五 ルビ（ふりがな）は原則としてひらがなとし、難読字には適宜ルビを振った。
- 六 本文中の編集上の註記は「」に入れ、著者による註と区別するため、本文よりも小さな文字で示した。
- 七 本文中に、今日の人権意識に照らして不適切と思われる語句や表現があるが、時代的背景と、作品の歴史的価値にかんがみ、加えて著者が故人であることから、底本のままとした。

翁の発生

一 おきなと翁舞ひと

翁の発生から、形式方面を主として、其展開を考へて見たいと思ひます。しかし個々の芸道特有の「翁」については、今夜およりあひの知識の補ひを憑む外はないのであります。翁芸を飛躍させたのは、猿楽であります。翁が、田楽の「中門口」に相当する定式の物となつた筋道が、幾分でも訣つて貰へるやうに致したいと存じます。

おきなと言ふ語は、早くから芸能の上に分化したおきなの用語例の印象をとり込んでゐます。尠くとも我々の觀念にあるおきなは、唯の老夫ではない。芸道化せられたおきなを、實在のおきなに被せたものであります。

おきな・おみな(媼)の古義は、むつと邑国の神事の宿老の上位にある者を言うたらしい。おきな・おみなに対して、をぐな・をみなのある事を思ひ併せると、大(お)・小(を)の差別が、き(く)・み(む)の上につけられてゐる事が知れます。つまりは、老若制度から出た社会組織上の古語であつたらしいのです。舞踊を手段とする鎮魂式が、神事の主要部と考へられて来ると、舞人の長なるお

きなの芸能が「翁舞」なる一方面を分立して来ます。雅楽ががくの採桑老さいしやうらう、又はくづれた安摩あま・蘇利古そりこの翁舞と結びついて、大歌舞おほぶらまつまひや、神遊びの翁が、日本式の「翁舞」と認められたと見ても宜よろしい。尾張ノ浜主おわりの

翁とてわびやは居らむ。草も 木も 栄ゆる時に、出でゝ舞ひてむ（続日本後紀）

と詠じた舞は、此交叉この時にあつたものと思ひます。翁舞を舞ふ翁の意で、唯の老夫としての自覚ではなさ相さうです。おきなさぶと言ふ語も、をとめさぶ・神さぶと共に、神事演舞の扮装演出の適合を示すのが、元であつた様です。

翁さび、人な咎めそ。狩衣かりゆい、今日ばかりとぞ 鶴たづも鳴くなる

と在原の翁の嘆なげじた、と言ふ歌物語の歌も、翁舞から出た芸謡ではなかつたでせうか。古今集の雑ざぶの部にうんざりする程多い古い人の述懐も、翁舞の詠歌と見られぬ事もない。私などは「在原」を称するほかひ人の団体があつて、翁舞を演芸種目の主なものにしてみたのではないかとさへ思うて居ゐます。

山姥やまうばが山の巫女みこであつたのを、山の妖怪と考へた様に、翁舞の人物や、演出者を「翁」と称よなへる様になり、人長にんぢやう（舞人の長）の役名ともなり、其表現する神自体（多くは精靈的）の称号とも、現じた形とも考へる様になつて行つたものであります。

だから「翁」は、中世以後、実生活上の老夫としてのみ考へる事が出来なくなつてゐるのです。

此夜話の題目に択えらんだ翁は、其翁舞の起原を説いて、近世の歪んだ形から、元に戻して見る事に落

ちつくだらう、と思ひます。

二 祭りに臨む老体

二夏ふたなつ、沖繩諸島を廻つて得た、実感の学問としての成績は、翁成立の暗示でした。前日本を、今日に止めたあの島人の伝承の上には、内地に於ける能芸化せられた翁の、まだ生活の古典として、半なかば現実感の中に、生きながらくり返されてゐる事を見て来たのです。

私は日本の国には、国家以前から常世神とこよみといふ神の信仰のあつた事を、他の場合に度々述べました。此は「常世人」といつた方がよいかと思はれる物なのです。皇極天皇紀に見えてゐるのが、常世神の文字の初めでありますが、此は、原形忘却後の聯想れんさうを交へて来た様で、其前は思兼神おもひかねのかみも、少彦すくひひこ名命なのみことも、常世の神でした。然し純化しない前の常世人は、神と人間との間の精霊の一種としたらしいのが、一等古い様であります。

元来ひとと言ふ語の原義は、後世の神人に近いので、神聖の資格をもつて現れるものゝ義である、と思ひます。顯宗紀けんそうぎの室寿詞むろじうあひことは「我が常世たち」の文句で結んでゐます。此は、正客なる年高人としたかびとを讃頌した語なのです。常世の国人といふことから、常世の国から来る寿命の長い人、唯の此世の長生の人と言ふ義になつて来たのです。

日本人は、常世人は、海の彼方あなたの他界から来る、と考へてゐました。初めは、初春に來るものと信じられてゐたのが、後は度々來るものと考へる様になりました。春祭りと刈上げ祭りは、前夜から

翌朝まで引き続いて行はれたものでした。其中間に、今一つあつたのが冬祭りです。ふゆまつりは鎮魂式であります。あき・ふゆ・はるが暦法の上の秋・冬・春に宛てられるやうになると、其祭りも分れて行はれる。其祭りの度毎に、常世人が来臨して、禊ぎや鎮魂を行うて行く。かうなると又、臨時の祭りが、限りなく殖えて来ました。

田植急祭りに臨むさつきの神々なども迎へられ、季節々々の交叉期祭りには、邪気退散の呪法を授けるか、受けるか訣らぬ鬼神も来る様になりました。さうしたまれに而も、頻々とおとづれるまればと神も、元は年の交叉点に限つて姿を現したものでした。此等の常世人の、村の若者に成年戒を授ける役をうけ持つてゐた痕が、ありくくと見えてゐます。春祭りの一部分なる春田打ちの感染所作は、尉と姥が主役でした。これの五月に再び行はれる様になつたのが「田遊び」です。此にも後に、田主など、言ふ翁が出来ますが、主要部分は變つて居ます。簑笠着た巨人及び其伴神なる群行神の所作や、其苛役を受けて鍛へ調へられる早処女の労働、敵人・害虫獣等の誓約の神事劇舞などが其です。此が田楽の基礎になつた「田遊び」の本態で、其呪師伎芸複合以前の形です。

高野博士が「呪師猿楽」なる芸能の存在を主張せられたのは、敬服しないでは居られません。但、本芸が呪師で、其くづれ・脇芸とも言ふべきのが、呪師に入つた猿楽で、唯呪師とも言ひ、呪師猿楽とも並称したらしく思はれます。此「呪師猿楽」が、田遊び化して田楽になつたとするのが、私の考へです。だが一口には、田楽は五月の田遊びから出てゐると申してよろしい。此猿楽は、田楽では、もどきと言ふ脇役に、倂を止めました。能楽と改称した猿楽能では、狂言方とまで、変転を

重ねて行きました。わき方も、勿論此から出たのです。結論に近い事を申しますと、翁も純化はしました。やはり此で、黒尉は猿楽の原形を伝へてゐる、と申してよろしいのです。

猿楽の用語例の一部分には、武家以前古くから興言利口など、言ふべき、言ひ立て又は語りの義があります。興言利口も、其根本になるべき話材までも、さう言ふ様になりました。此は、狂言の元の宛て字が興言であると共に猿楽の、言と能との二方面に岐れる道を示すものです。能楽が専ら猿楽と称へられたのは、此方面が主となつてゐたからかと思ひます。故事語りに曲舞の曲節をとりこみ、ことほぎのおどけ言ひ立てを現実化したのが、猿楽の表芸を進展させた次第であります。能芸の方は寧先輩芸道なる曲舞・田楽の能などからとり込んだらしいのです。

猿楽能に於ける翁は、此言ひ立て・語りを軽く見て、唱門師一派の曲舞（の分流）から出て、反閉芸を重くした傾きがあります。だが、元々、猿楽と言つても、田楽の一部にも這入つて居たのです。だから、田楽にも、その演芸種目の中に猿楽が這入つてゐたのです。此が呪師芸や、其後身なる田楽のわき役（もどき役、同時に狂言方）から独立して来たものと思ひます。

だから、田楽にも、翁の言ひ立てや語りがあつたらしいのです。唯、田楽能をまるどりして、自立したにしても、猿楽能自身の特色がなくてはなりません。其は、翁の本家であつた、と言ふことです。語りの方は、開口や何々の言ひ立ての側に岐れて行つたのでせう。開口も、何々の言ひ立ても、元は翁の中に含まつて居たと見えるのです。奈良に残つた比擬開口や、江戸柳宮の脇方の開口の式なども、同じ岐れです。其もどきと言ひ、脇方の勤めると言ふのは、事実の裏書きであります。此

脇方——並びに狂言方の——翁一流の式に対する関係や、翁が最古式を保つてゐるとの信仰は、猿楽がわき芸であつた事を、暗示してゐるのではないでせうか。田楽と違ふ点は、念仏踊りの要素を多く含んだ彼に対して、神事舞としての部分を重く見てゐる点にある、と言へます。

冬の鎮魂を主とし、春田打ちに関係の深いのが、猿楽の、呪師習合以前の姿なのです。田植ゑに臨む群行神の最古の印象は、記・紀のすさのをの命の神話の外に、播磨風土記には統一のない形の、数多い説話として残つてゐます。此間に、常世人自身も、海の彼方から来ると信じられたものが、天から降ると考へられる様になり、山に住む巨人とせられる様にもなつて行きました。従つて、常人と言ふ名も変り、其形貌性格や対人地位なども易つて行く一方には、原形に止り、或は、二つの形を複合した信仰も出て来ました。

我々の研究法は、経験を基調としたものであります。資料の採訪も、書齋の抜き書きも、皆、伝承の含む、ある昔の実感を誘ふ為に過ぎません。実感による人類史学と言ふべきものなのです。一芸能の翁に拘泥せず、田楽・神楽・歌舞妓其他の現在芸能は固より呪師田楽以前の神事・劇舞踊などに現れた翁の形態の知識の上に、更に、其現に行はれてゐる演出の見学から、体験に近い直観を得ねばなりません。沖繩の島渡りをして、私の見聞きしたのは、此から話さうとする三つの型でありました。

三 沖繩の翁

祖先考妣の二位の外に、眷屬大勢群行して、家々をおとなふ形。盂蘭盆の行事である(一)。海上或は洞穴を経て、他界の異形(又は莊嚴な姿)の、人に似た靈物が来て、村・家を祝福する形。清明節其他、祭りの日にある(二)。村の族長なる宗家の主人並びに一門中の代表者と見なされる群衆を伴うた、前族長なる長者が踊り場へ来て、村を祝福するのを一番として、村々特有の狂言(能狂言・俄などに似た)を行うて、後は芸尽しになる。村によれば、長者の一行が舞台に来ると、家長の挙げる扇に招かれて、海の彼方の富みの国から、其主神が来て、穀物の種を与へて去る式をする処もある。此神の名は儀來の大王、長者の名は長者の大王、家長の名は親雲上と言ふ。童満祭に行ふ(三)。私の目で見た知識よりも、更に大きな補助を、鳥袋源七・比嘉春潮二氏の報告から得ました。

此中で(一)は最、常世人に近い形であります。海の彼方なる大やまと——又は、あながまあと云ふ国があると考へたのが變じて、其行事又は群行の名としたのらしい——から、祖靈の男女二体及び、其他故人になつた村人の亡霊の来る日を、盂蘭盆に習合したので、其又一つ前には、初春を意味する清明節に、常世人として来た事が考へられます。此中心になる大王前と言はれる老夫——老女を伴ふ——が時々立つて、訓戒・教導・祝福などを述べるのであります。其間に、眷屬どもの芸尽しがあります。

此からしても、内地の古記録から考へられる常世のまればとの元の姿はやゝ、明るくなつて来ます。此と通じてゐるのは(三)の式であります。此は村踊りと言ひ、又村芝居とも言はれてゐます。祖

靈を一体の長者の大主とし、眷属の靈を一行としたものです。さうして今は、其本^{ほん}処^{じょ}の考へを忘れてゐますが、他界の聖地から来たものに違ひありません。親雲上は、其等の群行から、正面に祝福を受ける人として、予^{あづか}め一行^{いっけい}を待つ形が變つたのでせう。其に、儀来^{ぎらい}の大主を加へたのは、長者大主一行の本義の忘れられた為、更に祝福の神を考へ出したのです。

此が變じて(二)になると、色々の形に變化してゐます。なるこ神・てるこ神と言ふ二体の、聖なる彼岸の国主とするのもあり、唯の一体の海神^{うみのかみ}とする処もあります。もつと純化しては、海に向うのに^らい・^かないの国の神とし、更に天上の神として、おぼつ・かぐらと言ふ其国を考へてゐます。其史実化したのが、あまみきよ・しねりきよの夫婦神です。先島^{せんじま}の中には、まやの国といふ彼岸の聖地から、まやの神及びともまやと称する神が来るとしてゐるものもあつて、此は、蒲葵^{ほぐい}の簍笠を被つた異形神であります。同じく、先島諸島に多く、あかまた・くろまたなど言ふ風^{ふう}に、仮面の色から名づけた二体の巨人が、蔓草^{つるくさ}を身に被り、畏^{おそ}ろしい形相の面を被つて出ます。処によつては、青^あまたと言ふのが、代つて出る事もあつて、洞穴又は村里離れた岬などから出るのです。此は、鬼と言ふべきものであります。に^らいの大主と浄化した地方に対して、此^{この}に^いる宮城^{みやぎ}から来る者は、祖靈と神との間に置くべき姿をしてゐます。祖靈の、異形身と畏怖の情とが、其^まれ^びととの關係を忘れた世に残れば、単に、祝福と懲罰と授戒との為に来る巨人を、考へる様になる筈^{はず}です。此が、聖化し、倫理化して考へられると、に^らい^かないの神となるのです。

四 尉と姥

かう言つて来ますと、考妣^{かうひ}二体、又は一位の聖なる者の、或は群行者^{あるい}を随^{したが}へて来る神来臨の形式が思はれます。内地の、古代から近代に続いてゐる、まればとの姿も一つ事なのです。考妣二体の聖なる老人と言へば、直に聯想するのは、高砂の松の精と住吉明神一对の「尉と姥」の形です。謡大嘗祭の曳き物なる「標山」にすら、蓬萊山の中に、翁媪の対立は、考へられて居ました。平安初期に、既に、妣二位のまればとを、常世の蓬萊化した時代にも、仙人の代りに据ゑて怪しまなかつたのです。高砂に出る住吉明神は、播州からは彼方の津の国をさす処に、来臨する神と、神行き嬉^あひの信仰とを印象して居るのです。

日本の書物で、まづ正確に高砂式のまればとの信仰を書き残したのは神武紀です。香具山の土を、大和の代表物として呪する為に取りに行つたのは、椎根津彦と弟狛とでした。弟狛は男の様に考へられて来ましたが、兄狛を兄か姉かとしても、此は、女性の神巫だつたのです。男の方は老翁になり、女の方は老媪に扮し、敵中を抜けて、使命を果しました。此は、常世人の信仰があつたから出来た物語です。敵人は見逃し、御方は祝福せられる呪詞呪法の助勢を得た事を、下に持つて居るのです。呪詞呪法は、常世の国から齎^{もち}らされたもの、と信じられてゐたのでした。

歳暮に来て、初春の年棚の客となる歳神——歳徳神とも言ふ——の姿も、高砂の尉と姥の様な、と

形容する地方が多いやうです。さすれば、考妣二体の祖霊です。近世の歳神は、海を考へにおいた常世神と違つて、山から来る様に、大抵思はれてゐます。同じ名の神の性格にも、古今で、大分違ひがある様ですが、出雲人の伝へた御歳神・大歳神は、山祇の類と並べてある処を見ると、山の中に居るものと見てゐたらしいのです。古く、海祇から山祇に変化すべき理由があつたからです。近代の歳神には、穀物の聯想が少くなつて、曆の歳の感じが多く這入つてゐますが、此名は俗陰陽道などが、古代の神の名を利用して、残し伝へたものと思はれます。だから、方位の聯想などがあるのです。

山から来る歳神にも、一人としか考へられてゐないのがあります。又群行を信じてゐる地方もあります。歳神にお伴があるわけです。かうなると、祖霊來臨の信仰に近づいて來ます。年神棚を吊らず、年縄や年飾りをせぬ家や村があります。此等は、山の歳神以前の常世神の迎へ方を守つてゐて、家風の原因を忘れたものが多いのでせう。だが、まだ外にも理由はある様です。

五 山 び と

常世の国を、山中に想像するやうになつたのは、海岸の民が、山地に移住したからです。元來、山地の前住者の間に、さうした信仰はあつたかも知れませぬ。だが書物によつて見たところでは、海の神の性格職分を、山の神にふり替へた部分が多いのです。

私は山の神人、即山人なるものを、こみ入つた事ながら、説かねばならなくなりました。山守部

と山部とは別の部曲かまきべです。私は、山部を山人の団体称呼と考へてゐます。其宰領が、山部宿禰すくねなのでせう。ちようど海人部あまべが「あま」と言はれるやうに、山部も山やまと言はれてゐます。山ノ直あたへ・山ノ君などいふのが、其それです。海人は、安曇氏あづみの管轄で、安曇氏は海人部の族長ではない事を主張して居ます。が、山部氏は山人族の主長であるらしいのです。安曇氏の如きも、其ほど海人の血から離れてゐるか、信じられません。山人なる山部が、其本職を忘れて来る様になつて、山部・山守部の混同が起ります。山人とは、どうした部民でせうか。

私の仮説では、山の神に仕へる神人だとするのです。海人部が、海祇わたつみに奉仕して、時には、海の神人の資格に於て、海祇としての行事を撰行せんかうする事がありました。海人の献たてまつつた御贄みになへは、海祇わたつみの名代だいで、同時に、海祇自身のする形なのでした。私は海部・山部を通じて、先住民の後とばかりも言へぬと考へます。おなじ族中の者が、海神人・山神人に扱えらばれて、常住本村から離れて住んで居て、其が人数の増した為に、村を形づくつたものもあると思ひます。

勿論、前住民の服従を誓ふ形式の寿詞よじ奏上を以て、海人・山人のことほぎ（祝福）、みつぎの起りと考へる事も出来ませんが、其は第二次の形です。初めの姿は、海祇即、常世人（わたつみの前型）に扮するのは、村の若者の聖職なのでした。其が山地に入つて、山の神を、常世人の代りにする様になつて来る。此これまでは、常世の海祇の呪法・呪詞のうけての代表者は、山の神なので、其山の神が、多くの地物の精霊に海祇の呪詞を伝へる役をしました。其が一転して、海祇に代る様になつたのであります。

さうすると、山の神の呪詞は、宣下式ではなく、又奏上式でもありません。つまり仲介者として、仲間内の者に言ひ聞かせる、妥協を心に持った、対等の表現をとりました。此を鎮護詞と言ひます。宣下式はのりと、奏上式なものにはよごとと言ふ名がありました。ちようど其間に立つて、飽くまでも、山の神の資格を以て、精霊をあひて、としてのもの言ひなのです。山の神に山の神人が出来たのは、此為です。だから、海祇の代りをする海人の神人が、前住民或は異民族とすれば、山人の職が出来てからの事です。即、海祇の代りに神事を行ふ者が、村国の主長よりも低い事になります。常人は村の主長よりは、位置は高かつたのです。だから、海人が服従の誓約なる寿詞や御贄を奉るのは、山の神人の影響を更に受けたのです。

海村の住民の中、別居して神に仕へる形式が行はれ、男や女のさうした聖役に当るものが出来ました。女は、たなばたつめです。かうした人々の間に出来た村が、異種の村と混同せられる様になつたのでせう。山の村も、同様にして出来ましたのでせう。其が、蛮人の村と思ひ違へられる様になつた事もありませうが、此は、わりに明らかに、国栖・土蜘蛛など、区別せられた様です。海人部の民が、所謂あまのさへづりをする異人種の様に考へられた程ではありません。海部の民は、呪法・呪詞に馴れて居ました。其が諸国の下部の起原です。

海人部の民の中の、小・中宗家など言ふべき家の中からも、宮廷の官司の馳使丁が出ました。此が海人の馳使丁です。其内、神祇官に仕へた者が、特にあまはせづかひと言はれたらしいのです。更に、此中から、宮廷の語部として、海語部と言ふ者が出来たと見られます。天語部は鎮護詞を唱へ

ると共に、其中の真言とも言ふべきうたを、おもに謡ふ様になりました。其が「天語歌」のあるわけで、其とおなじ性質で、寿詞や鎮護詞式でないものが、神語といはれたらしいのです。神語歌の末に、天語の常用文句らしい「あまはせつかひ、ことの語り詞也、此ば」と言ふ、固定した形のついであるわけであります。

海語部が、諸国の海人の中にも纏はつて来ました。一方、卜占を主とする海人の卜部が、又諸国に還り住んで、卜部の部曲が拡がります。宮廷の海語部は、後には、卜部の陰に隠れて顕れなくなり、卜部の名で海語部の行うた鎮護のことほぎを言ひ立てる様になりました。此卜部が、陰陽寮にも勢力を及ぼしました。踏歌の節の夜の異装行列は、元、卜部の海語部としての部分を行うたものらしく、群行神の形であつて、作法は、山人の影響を受けたものです。服従の誠意を示しに、主上及び宮殿をいはふ言ひ立てて来るのであります。

六 山 づ と

此高巾子の異風行列は、山人でもなかつた。万葉集には、元正の行幸が添上郡の「山村」にあつた事と歌とを記してある。

あしびきの山に行きけむ山人の 心も知らず。やまびとや、誰(舎人親王——万葉卷二十)

仙人を訓じて、やまびととした時代に、山の神人の村なる「山村」の住民が、やはり、やまびとであつた。此歌は、神仙なるやまびとの身で、やまびとに逢ひに行かれたと言ふ。其やまびとは、あ

なた様であつて、他人でない筈だ。仰せのやまびとは、外にありとも思はれぬ、とおどけを交へた頌歌である。此歌の表現を促したのは、

あしびきの山行きしかば、山人の 我に得しめし山づとぞ。これ（元正天皇——同卷二十）

と言ふ御製であつて、此も、山人と言ふ語の重つた幻影から出た、愉快の情が見えて居ます。だが、其よりも、注意すべきは、山づと言ふ語です。家づとは、義が反対になつてみます。山づと・浜づとなどが、元の用語例です。山・浜の贈り物の容れ物の義で、山から来る人のくれるのが、山づとであり、其が、山帰りのみやげの包みの義にもなる。元は、山人が里へ持つて来てくれる、聖なる山の物でした。此は、後に言ふ山姥にも絡んだ事実で、山草・木の枝・寄生木の類から、山の柔い木を削つた杖、其短い形のけづり花などであつたらしく、山かづら・羊歯の葉・寄生・野老・山藍・葵・樵・山桑などの類に、時代による交替があるのでせう。

柳田先生の杓子の研究を、此方に借用して考へると、此亦、山人の鎮魂の為の木ひさごでした。神代記のくひさもちの神は、なり瓢の神でなく、木を削つた、古代の木杓子の霊の名であつた、と言はれませう。此、くひさと言はれたと思はれる杓子は、いつ頃からの山づとかは知れませぬが、存外、古代からあつたものらしいのです。かうした山人は、初春の前夜のふゆまつりの行事なる、鎮魂式の夜に来ます。即、嚴冬に来たのです。若宮祭りの翁の意義が、其処に窺はれる様に思はれます。

若宮祭りの翁は、高い神——統教訓抄など——と言ふより、ことほぎの山の神で、春日の社殿及び